生活世界とその主題化

――自然的態度から超越論的態度へ――

鈴木康文

序

フッサールの生活世界論は、彼の後期思想のなかでもその拡がりやその後の影響力からするともっとも着目されたものといえよう。たとえば、科学論や、シュッツに代表されるような社会学、文化人類学あるいは地理学、現代では環境論からもその意義が問われている。そこにはフッサールが探求した超越論的哲学ではなく、そこから一定の距離をおく研究分野においてもさまざまな受容関係が取り沙汰される。そのような試み、あるいは拡大解釈は十分に意義をもつものであり、生活世界論は多様に展開するだけのいわば豊潤な内容を十分に兼ね備えたものといえよう。

しかしこのような自然的態度のもとでの生活世界論に対し、フッサール自身が生活世界論に関して、とくに超越論的哲学のなかでどのような役割をもたせてきたのかは、またそれとは別に問われる課題である。

実際フッサール自身は個別科学との豊かな交流を予想させるこうした生活世界の存在論を展開することなく終わった。いわば、自然科学の対立図式のなかでの生活世界の役割、また超越論的現象学の通路のひとつとして取り上げたにすぎない。むろんこのことは、フッサール自身の時間的制約も一因だが、やはり貧弱なイメージはつきまとうこととなる。そこでフッサール自身が生活世界においてどのような射程

をもっていたかその可能性をフッサールをとおして改めて問うこととする。

このため本稿ではかれの晩年の遺稿である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と略記）を中心に議論を進めるが、まず、生活世界の概念を簡単に記述することから始め、その後の記述の手がかりとする（第一章）。そして自然科学やそれの主題である（特殊）世界と生活世界との関わりを、生活世界の側から、いわば日常性のなかで見つめる。次にこうして規定された生活世界をいかに主題化するかをめぐって自然的態度と超越論的態度という態度変更を取り上げることにする（第二章）。ここで生活世界というその課題を、なお形式的ではあるが浮かびあがらせる。そしてさらに、より具体的作業として自然的態度における生活世界を主題化し、それにともなって生活世界の概念をどのように捉えることができるかを再考する（第三章）。特に生活世界概念に伴うある曖昧さを、その源泉にさかのぼって検討することにする。そのための手がかりとして、世界の総体と地平を巡るクレスゲスとアグィーレの解釈を取り上げる。そして最後に以上を踏まえた上で、自然的態度による生活世界の主題化として生活世界の存在論が、フッサールにおいて本来どのような位置づけをなしているか、またそれによって生活世界はいかに規定されるべきか、また超越論的態度への方途の中でどのような位置づけがなさるかを改めて取り上げることにする（第四章）。

第一章　学と生活世界のかかわり

フッサールによれば、客観的な自然科学は、構築された理念に基づいて生活世界を規定しつくし、それは逆に経験された生活世界をそれ自身から解明することから眼差しを逸せてしまったのである。そのことは客観的な自然科学と、その生活世界を経験する主観とのかかわりを見失うことを引き起こし、その学と主観とのつながりをいわば学の側から切り捨てることにつながった。こうした主観性の忘却が主観にとっての学の意義を不明にし、さらに学に対する責任の不明確さを招いたわけであり、そうした事態をもって「危機」とフッサールに言わしめたわけである。[1] 我々は、この主観に対する学の意義を取り戻すために、まず学と生活世界とのかかわりから見ていこう。

学と生活世界とのかかわりについては、生活世界は自然科学にとって忘れ去られた意味基底である。「諸々の学は、生活世界から、学のそのつどの目的にとってそのつど必要なものを利用することによって、生活世界の自明性の上に依っている。しかし、生活世界をこうした

仕方で利用することは、生活世界自身をその固有の存在仕方で学的に認識することではない[2]。自然科学は生活世界の自明性にいわばよりかかった上で成り立っているのであり、自らが生活世界に対して、いかなる位置付けをなしているか探求することはない。しかし生活世界と学とのかかわりを、このように一方的に基づけ関係で見ることは、逆に生活世界の広がりの大きさを捉え損なうものであろう。「学一般は、人間による人間的な能作である。そしてその人間はそれ自身世界のなかに、つまり一般的な経験の世界のなかにいる人間であり、その能作は、実践的な諸能作の一種であり、理論的と呼ばれるある種の精神的形成体に向けられている実践的能作の一種である。あらゆる実践と同様に、この能作もまた行為者自身にも意識されている固有の意味において、あらかじめ与えられている経験世界に関係し、同時にその経験世界に組み込まれている」[3]。すなわち科学の成果はその都度生活世界に反映し、生活世界の中に組み込まれることになる。そこでは客観的な科学の世界は、単に生活世界に対立し、また生活世界に基づいていると捉えられるのではなく、生活世界という全体の一部をなし、その都度生活世界を豊かにしていくとみなされている。「客観的-学的世界についての知は、生活世界の明証性に〈基づいている。〉（……）さらに明らかなことは、これら全ての理論的成果は、生活世界の妥当性という性格をもち、妥当性として生活世界の成素に絶えず加わりながら、生成する学の可能的能作の地平として前もってすでに生活世界に属している。それゆえ、具体的な生活世界は、〈学的で真の〉世界に対してそれを基礎づける地盤であるとともに、生活世界固有の普遍的具体相においては学を包括する」[4]。

ここでは、「客観的で真の世界」と「生活世界」との逆説的な相互依存関係[5]が成立しているわけで、フッサールがこうした自体をいかに捉えていたかが問われなければならない。

こうした課題は『イデーン』期のような領域存在論の基付け理論では、十分に展開されなかったことである。なぜなら『イデーンⅡ』においては自然科学の方法そのものの分析、特に数学的手法にまで至っていなかったので、自然科学の世界の独自性がなお徹底して解明されなかったからである[6]。

第二章　自然的態度と超越論的態度――生活世界の主題化の態度として――

さて以上のような問題に出会うとき、生活世界ということがけっして一つの個別科学の課題という性格に留まるものではなく、ある普遍

性を帯びていることが確認されよう。

フッサールはこの生活世界を問うために最初のエポケーを遂行する。すなわちそれは客観的科学に対するエポケーである。その意味するところは、「客観的科学の認識を共に遂行することのエポケー、客観的科学の真偽に関心を払う全ての批判的な態度決定のエポケー、しかも客観的な世界認識という客観的な科学を導く理念に対する態度決定のエポケー」[7]である。それゆえそのエポケーは、その客観的な科学が全く生起していないかのように、人間生活を捉えなおすということではない。そうではなく、このエポケーは客観的で理論的な関心全体に関するエポケーであり、その際必ずしも客観的な科学の研究者としてばかりではなく、知を求めるもの固有の意志や行為に関して、共にその関心を遂行しなくなるのである。[8]

こうして我々はもっぱら生活世界に関心を向けなおし、それによって新たな学の主題としての生活世界が、開示するのである。「生活世界は、我々が学以前やあるいは学以外の生において経験し、さらに経験されたものを越えて経験可能であることを知っているような、時空的な物の世界である」。[9]

ここでいう実際に経験されたものを越えたあらかじめ経験可能であることを知っているということが「地平」を意味し、さしあたりまず生活世界は、この世界地平として現れる。この世界の特徴を一言でいうなら、「主観的-相対的」ということであり、それはいわゆる客観的な科学の世界と著しく対立する。全ての主観にとって無条件に妥当する真理という目的を設定し、それを客観的というなら、我々はやはり客観学への方途に達するのであり、そうした目的の設定によって、生活世界を越える仮説が生じるのである。

それに対し生活世界は主観的-相対的でありながら、実はやはり一定の普遍的な構造を有しており、それだからこそ、客観的な科学がそれをもとにして営まれ得るのである。「生活世界は、その中で目覚めて生きている我々にとって、いつもすでにそこにあり、あらかじめ我々にとって存在し、理論的であれ、理論以外であれ、全ての実践のための〈地盤〉なのである」。[10]世界は、主観である我々に、偶然そのときどきに与えられるというのではない。世界は「いつもすでに、あらかじめ」という以外のあり方では、決して我々に与えられ得ないのである。この「いつもすでに、あらかじめ」という仕方によって現実の実践の地盤になっているばかりか、あらゆる可能的な実践をそもそも準備しうるのであり、それが地平をよばれるゆえんである。我々はまさにこうした世界の中に生きており、しかもこの世界があるという確信

の中に生きている存在なのである。

さしあたりこのように示された生活世界も、実は二つの仕方で主題化することが可能である。すなわち素朴で直進的な「自然的態度」と、生活世界が主観にいかに与えられるかというその与えられ方に反省的に向かういわゆる「超越論的な態度」とにである。

まず前者における態度では、「生活世界の存在論」という課題として述べられる。[11] そこでの世界はあらかじめ与えられた存在の総体であり、「時間空間という世界形式の中で二重の意味での〈場所において〉（空間的な位置と時間的な位置にしたがって）配置された物の総体、つまり時空的な〈存在者〉の総体」[12]として語られる。あらかじめ与えられた存在の総体には、主観的-相対的だが一定の類型性が見られ、それはアプリオリな内容として捉えられる。そしてこの類型によって、あらゆる生やその生の営みとしての学問が拘束されているのである。

フッサールはこの生活世界の存在論という課題を、『危機』において展開することなく終ったが、それは彼の関心が、あくまでも超越論的な態度による生活世界の分析にあったからといえる。しかしそうしたことが、後に示すように、この自然的態度における生活世界の存在論の位置をあいまいなままにし、いろいろな解釈を生み出したと考えられる。この問題は後でもう一度見直すことにし、簡単ではあるが、生活世界を主題化するもう一つの態度である超越論的態度を規定する。

第二の態度は、「所与性仕方のいかにということに対する、首尾一貫した普遍的関心」[13]のもとに学を遂行するものである。この態度は世界の存在者にも関心を向けるが、けっして直進的にではなく、その所与性仕方に関心を向け、それによってこの世界が我々にとっていかに成立するかを問うものである。「自然的生は、それが学以前の関心であれ学的な関心であれ、理論的な関心であれ実践的な関心であれ、普遍的で非主題的な地平の中で関心をもつ生である。この地平はその自然性においてはまさに存在者として常にあらかじめ与えられている世界である。それゆえ我々がそこに向かって生きている限り〈あらかじめ与えられている〉という言葉を必要としない」[14]。自然的態度においてはなんらかの関心に向かっており、単に世界地平にあるなんらかのもののみに関わる。その限りではあらかじめ与えられている世界地平には決して関心が向くことはない。超越論的態度による生活世界の主題化は、この「主観にとってあらかじめ与えられていること」に関心を向けかえることによるのである。世界はあらかじめ与えられているがために、まさに自明なものとされていたのである。我々は関心を向けかえることによって、この自明性をそのまま受け入れるのではなく、この自明性がいかに成立するかを問うのである。この学は、世界の

地盤の上にたつ学、つまり客観的な科学に対し、「世界の先所与性の普遍的なありかたに関する学であり、それぞれの客観性に対し普遍的な地盤存在を形成するものに関する学」[15]である。この学は自然的態度を全面的に変更することによってのみ可能である。すなわちあらかじめ与えられた世界の妥当を遂行することなかで常に共に生きることをもはやめ、むしろこの妥当の遂行を差し控えるのである。[16]

「これが超越論的エポケーといわれ、あらかじめ与えられた世界が普遍的な地盤として存在するということを解明するという動機づけのもとに遂行される。この第二のエポケーによって示されることは、最初になされた「妥当地盤としてのあらゆる客観学から我々を解き放つエポケー」がなお不十分であり、「このエポケーを遂行するにあたって、なお依然として我々は世界の地盤の上にたっている」[17]ということである。

こうした「自然的地盤」にたってなされる生活世界の学は、超越論的な関心をもたず、世界の類型性を規定するに留まることになる。[18]世界の類型性を示す本質は「生活世界のアプリオリ」と呼ばれるのに対し、第二の超越論的エポケーによって開示された本質は、「普遍的相関のアプリオリ」といわれる。

世界の先所与性は、主観にとってあらかじめ与えられたものであるが、両者の相関関係こそが、超越論的な関心にとって課題なのである。「首尾一貫して遂行されたエポケーのあいだ、世界は、その存在意味を与える主観性の相関者として純粋に眼差しにおかれている。そしてその主観性が妥当させることによって、その世界はそもそも〈存在する〉のである」。[19]しかしこの相関関係は、地平性のもとでしか提示されない。[20]地平の展開によって、なお気づかれなかった連関が解明され、新たな相関関係が露呈してくる。そうしてこの世界の先所与性は、（さしあたり形式的な課題としてであるが）超越論的主観性との相関関係として、しかも地平性の下で見いだされなければならない。

こうした次元そのものはすでに、『イデーンⅡ』においても示唆され、この探求される課題が「自然の底層」として語られたが、その分析は超越論的エポケーという方法が練り直されることによってようやく可能となったといえよう。[21]

以上我々はさしあたり形式的にではあるが、二つの態度のもとに世界に関する課題を位置付けた。我々はここで、自然的態度における生活世界から考察を始め、具体的にその課題へと立ち向かうことにする。

第三章　自然的態度における生活世界の主題化

自然的態度における生活世界を主題とするために、先ほど問題となった生活世界の二重性から出発することにする。すなわち生活世界は客観的な科学の地盤として機能しているが、その普遍的具体相から見る限り客観学をも包括している、という二重性である。この問題を集中的に取り上げた論文として、クレスゲス「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」[22]が挙げられるので、以下これにしたがって考察してみよう。

先の問題の解明のために、クレスゲスは生活世界の概念を広狭二義に区別している。狭義には生活世界は、学をも含めたあらゆる実践的理論的な特殊世界との対照によって得られた概念である。この狭義の生活世界を地盤にして、なんらかの主導理念のもとにしてうちたてられたのが、自然科学の世界を一例とする特殊世界である。これに対し広義の生活世界は、その具体相において、先に挙げた狭義の生活世界ばかりか特殊世界を含むものとして規定される。その意味での生活世界は、「歴史的な社会的-文化的世界」なのである。すなわちその世界は、人間の生活が関わりをもちまた産出するもの全てを含んでいる。その中には客観学に基づき技術によって生産された機械類も含められる。クレスゲスの主張は、生活世界が客観的な科学に対して地盤機能をもち、しかも科学に対して一定の限界付けと制約性をもたせることが可能であるのは、この生活世界の二義性によるのであり、先に挙げた広狭二つの生活世界の概念の一方にそれを負わせるのはできない、ということである。[23]

まずこうした広義の生活世界からするなら、客観的な科学世界はあくまでも一つの特殊な世界に過ぎず、その真理性の主張も歴史的な所産として相対化される。しかしこの広義の生活世界のみを受け入れるなら、この相対性ということも単なる主張にしかすぎないことになる。相対化ということ自身が、それではいかにして客観的な科学にたいする確証の源泉、および妥当基底として機能するのか示されないからである。[24]

これに対し、狭義の規定である生活世界が客観学の地盤として機能しているということをみると、その生活世界は知覚において構成される規定しか当てはまらなくなる。つまり例えばあらゆる複雑な器具や機械類も、この点では単なる自然の物と区別されなくなる。こうした

場合、生活世界が地盤機能をもつということは、単に我々が感性的で身体的な存在であるために知覚に依存している、という事実に格下げされることになる。この狭義の生活世界のみを受け入れた場合、客観的な科学の客観主義を批判することができなくなる。つまり客観主義が述べている、知覚は実は単なる真の客観的世界のあられにしか過ぎない、という主張に反論できなくなる。

クレスゲスによれば、生活世界の地盤機能の命題が批判的な命題であるのは、世界が真になんであるかを厳密に理論的に認識するという性格が客観的な科学に備わっているかどうかに関し、異論が唱えられるときである。しかしそうした異論が唱えられるのも、客観的な科学が生活世界の具体相に含まれて相対化されたときに限るのである。[25] 以上述べたことからクレスゲスは、生活世界の広狭二義の概念がもつ機能を一方に負わせることができない、と主張するのである。

しかしながらこうした論議に関し、次のような疑問点が指摘されよう。まず狭義の生活世界をクレスゲスのいう意味での知覚に限定することは、最初のエポケーを十分にくみとっていないのではなかろうかということである。クレスゲスは、「電話がいかなる物かはけっして知覚によって構成されることはない」から、世界を単なる知覚の世界として考察することは「抽象的」にしか過ぎない、と述べている。[26] しかし我々は、電話に関する科学的な知識や技術に関しては全く知らなくとも、電話を使用することができる。その意味では我々は電話を知覚によって構成しているのである。第一のエポケーは、客観的な学に関して共に遂行し関心を共にすることを中止しているに過ぎない。[27] そうであるから、単に電話を一例とする現代のエレクトロニクス技術へと、関心を直進的に向けないことなのである。そのエポケーによって開示された生活世界は「可能的な物経験の地平」としてもつのであり、しかもその物には、「人間の形成物」をも含んでいる。[28] 第一のエポケーは学的関心であれその他の関心であれ、その関心が向かっていることを差し控え、それらの目的追及にとって自明なままに利用している生活世界に関心を向けなおすことである。[29] それによって、種々の対象の主題化の地盤となっているが、それ自身は主題化されることのなかった生活世界の自明な「主観的で相対的」というその意義を、探求するのである。そうであるからクレスゲスのいうように、生活世界を一切の差異を無視した単なる知覚物とみなし、それを世界の一つの層であるとすることは、[30] 生活世界の地盤機能を問う為の方途からはずれることになる。

実際クレスゲスのいうような意味で生活世界を規定することは、むしろ他の関心を捨象する自然主義的な態度に基づく所産になるであろ

う。この場合の生活世界は、けっしてクレスゲスのいうような抽象的なものとみなされてはならず、最も具体性に富んだものといえるであろう。

生活世界が客観的な科学に対して地盤として機能していて、客観的な科学は生活世界の具体的な経験に基づいてその都度成果を挙げ、しかも成果は絶えず生活世界の中に流れ込んで沈澱し、沈澱することによってそれは新たに客観的な科学の目的のために利用され、またさらに客観的な科学を押し進めることになるのである。こうした構造は、この生活世界と客観的な科学世界との間の対照が常に引き続いて存続することを意味するが、しかし同時にこの客観的な科学の成果は常に生活世界の中に流入し沈澱するわけでもあるから、その両者の対照はその都度止揚されているのである。それゆえアグィーレが述べているように、こうした客観学に向かう実践は、「対照と対照の止揚を同時に意味している[31]」わけで、生活世界という二義性を、広狭にいわば固定化し、別々の機能を割り振ることは、生活世界の動態的な機能を見失うことになろう。

第四章　生活世界の存在論

実際生活世界は、主観的相対的でありつつも、やはり「普遍的構造」をもっており、「全ての相対的存在者がそこに結び付けられているこの普遍的構造は、それ自身は相対的ではない[32]」。しかもこの普遍的構造を有する生活世界と客観的科学との関係に関していうと、客観的な諸科学が前提としているのと「〈おなじ〉構造を生活世界としての世界はすでに学に先だってもっている[33]」のである。そうであるから、たとえ客観的学の成果が生活世界に流入したとしても生活世界の構造は変わらないのである。

フッサールは普遍的構造の例として「学以前にも世界は時空世界である[34]」といい、精密さとは無縁の、あくまでも直観的な意味での時間空間、あるいは因果性を挙げている。フッサールは、こうした生活世界の普遍構造を自然的態度において主題化する学として、「生活世界の存在論」を構想しているのである。それは生活世界の中に見いだされる本質類型を「普遍的で生活世界的アプリオリ」とし、客観的な科学の「客観的アプリオリ」に対立すると共にそれを基礎付けるのである[35]。

しかしフッサールはこの課題を仕上げることなく、直ちに生活世界を課題とする第二のしかも本来の態度である超越論的態度に向かい、

生活世界の主観に対する与えられ方へと一貫して眼差しを向かうことにしている。こうしたことになったのも、ワルデンフェルスがのべるように、「生活世界は直接的な記述の対象ではなくて、目標として方法的に設定された遡行的問いの対象であり、このような遡行的問いを通して生活世界はその先所与性において遡って獲得されるべきもの」[36]であるからである。フッサールにおいては生活世界の存在論は、単に素描に留まり、具体的には着手されなかったわけで、それ自身いかなる学かを明確な形で示されなかったこともあり、そのことが「些細ではないつまずきの石」[37]となっている。

実際クレスゲスは、この生活世界の存在論という学の位置付けと、その主題化の仕方をみるために、先の生活世界の二重性をそのまま引き継いで使用する。それは地平概念によって規定される世界概念に関わる。クレスゲスによれば、地平とは地平内部に現れうるものに対して、数多性にたいする単一性という性格をもっており、つまり包摂されるものにたいする包摂するものという性格をもっている。

彼はこの単一性と数多性の関係から世界概念の二義性を見いだすのである。[38]第一に世界は「総体」として規定されるが、それは部分の変動が同時に全体を変様させるという性格をもつ。第二に世界は「厳密な意味での地平」として考えられ、それは単一性が数多性の本質を限定するが、単一性の構造は数多性の変動によってはなんら変化しない。この二つの世界と先の生活世界の二義性とが結びあわされるのであり、ただしそれは生活世界の主題化する仕方によって定まるとされる。

まず狭義の生活世界は、「第一義的には、厳密な意味での地平として理解される」[39]。この狭義の生活世界は、主観に対してあらかじめ与えられており、それを通して学が形成されるので、客観的科学の地盤として機能した。しかもこの主観に対して与えられているということが、生活世界を地平たらしめているわけである。しかも「この地平という概念は、生活世界と生活世界の経験的主体とが相関していることを反省することによってすでにでてくる」[40]以上、この場合は超越論的な観点が主導している。

それに対し広義の生活世界は、その生活世界の経験主体の相関者としては主題化されることがないので、地平として主題化されることもない。[41]この場合生活世界は、高次段階にある「それ自体で存在する世界の一種」[42]とみられ、存在するもの全ての総体を意味する。この総体はいくつかの領域に区分してその一般的構造に関して問うことができ、それは『イデーンⅡ』における領域存在論に対応しているとみなされている。[43]この総体の世界のほうは、経験主体の相関者としてみられるのではなく、あくまで世界全体を反省することによって見いだされ

るので、存在論的な観点に基づく。そこからクレスゲスは、「生活世界という概念は、始めから存在論的なものと超越論的なものとの混成概念である」と結論付けるのである。[44]

つまりクレスゲスは、先の狭義の生活世界を地平概念と結び付けその関係を超越論的なものとみなし、他方広義の生活世界概念を総体概念と関係させて、そこに生活世界の存在論を位置付け、それは自然的な、すなわち存在論的な観点に基づくと考えている。

しかしながらこのような見解に関して、いくつかの批判がなされるであろう。まず生活世界の存在論の位置付けであるが、それは生活世界のなかであらゆる客観学の中に基底として働き、その真理性を可能としている「本質類型」を取り扱う。それはあくまでも直観に基づく純粋な本質学として規定され、その意味ではけっして客観的な学の精密性を持ち合わせてはいないが、しかし実はその精密性を形成する源泉なのである。しかもこの生活世界の存在論はあくまでも自然的態度のままで成り立っている。「全ての実践的形成体（その関心に関与することをさし控える場合の、文化的事実としての客観的な科学の形成体）すらただちにそれ自身の中に含む生活世界は、もちろん相対性の絶えざる変転の中で主観性に関係づけられている。しかし生活世界はいかに変転し、いかに修正されようとそれは本質法則的な類型を保持している。その類型に、全ての生と、さらには生活世界をその〈地盤〉とする全ての学が拘束され続ける。こうして生活世界は純粋な明証からくみとられる存在論をもっている」。[45]

こうしてみる限り、生活世界の存在論は「自然的地盤」[46]のうえに形成され、また諸学に対してその地盤を提供する学であるといえよう。そうであるなら、あくまでもクレスゲスのいう枠組にしたがって、それが総体としての生活世界の結び付き、しかもそれは先の広義の生活世界、つまり普遍的具体性のもとに常に変転する生活世界と関わるとはみなされないであろう。そして学の地盤機能が、超越論的態度にのみ基づいてみた生活世界によると捉えることもできないであろう。

こうした批判が成り立つのも、そもそもクレスゲスが区分したように、生活世界を総体と地平にわけ、しかもその区分がなされるのは自然的態度と超越論的態度との観点の相違によるとみなしていることが、堅持し得ないからである。

それでは生活世界はいかに理解されているのであろうか。すなわちごく日常的な生における生活世界はいかに規定されるのであろうか。クレスゲスがひきおこしたことも、この生活世界の規定が不明確なために生じたのである。ランドグレーベは、これに対し次のように述べ

ている。こうした場合には「世界が〈存在者の総体〉という存在論的概念によって規定されてはならない。こうした基底の仕方は、〈自然的な〉生が全ての学と哲学に先だって自己の世界を理解している場合のその理解の仕方ではない。むしろこの場合は、地平としての、しかも〈総体地平〉としての世界の規定の方がもっと適切である。この規定はもとより、自然的生の規定ではないが、しかし自然的生がいつもすでに自己の生を熟知している仕方によりよく対応している」[47]。すなわち日常的な自然的態度においては、生活世界を総体として規定しているのではなく、あくまでも地平を伴った総体としてとらえている。しかもそのような捉え方は、自然的態度にあっても充分に展開しうるものである。実際我々は、日常的な生において地平性から免れることはないし、そのことを十分に承知している。「自然的生は、それが学以前であれ学的であれ、また理論的であれ実践的であれ関心のある生は、普遍的で主題化されていない地平の中での生である。その地平がまさにその自然性において、常に存在者としてあらかじめ与えられている世界である」[48]。世界は地平的に与えられる存在者の総体であり、世界を総体として把握してもその地平性は消失しない[49]。

それゆえ地平はけっして超越論的概念としてのみ規定されるのではなく、自然的態度における概念でもある[50]。クレスゲスがみなしたように、広義の生活世界を主体のない総体とみなし、その総体を主題とする学を生活世界の存在論と規定することは堅持しえないのである。生活世界の存在論はあくまで直観に基づく類型性の本質学であり、類型性自身常に地平を伴っており、たとえ自然的態度による学であっても、その主体と関わっているということを外すことはできない。

結

我々は生活世界を主題化する仕方として、自然的態度と超越論的態度との二様性を素描し、そのうちさしあたり自然的態度における生活世界の意義を考察した。それによれば、生活世界は常に非主題的な仕方で地平としてその生にあらかじめ与えられており、それゆえその都度の生の関心にしたがって形成される特殊世界の地盤として機能している。こうした生活世界を総体としてみても、実は地平性を常に伴って把握されており、その地平をともなう総体性という構造は変わらない。

フッサールは生活世界が諸々の学の地盤としていかに機能しているかを探求するために、その普遍的構造を類型性において規定しようと

した。その学は「生活世界の存在論」といわれ、あくまでも自然的態度のもとに構想したが、それがいかなる学か彼自身は仕上げなかった。そのためにこの学が具体的にはいかなるものか、結局不透明なままに終っている。[13] ただこの学も地平性を切り捨てることによって成立するのではないことは確認された。むしろ彼はさらに重要な課題として、超越論的態度から生活世界の地盤機能を問い抜こうとしている。実際のところは、この第一のエポケーの段階で生活世界の地盤機能を問うことは、性急であるといえる。この第一のエポケーの遂行にあたってはなお以前として世界の地盤の上にたっている[14]以上、その地盤機能は第二の超越論的なエポケーを通して探求されることになる。我々は次にこの世界の地盤機能を超越論的態度のもとに探求する必要があるが、それはまた稿を改めて議論しなければならない。

註

フッサール著作集からの引用は(H)と略記して、巻数はローマ数字で示し、頁数はアラビア数字で表した。

(1) Vgl. H. VI. 3.（『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、一九七四年）
また拙論「フッサールにおける科学の方法の問題」、『哲学・思想論叢』（筑波大学哲学・思想学会）第四号、一九八六年を参照

(2) H. VI. 128.
(3) H. VI. 120.
(4) H. VI. 133f.
(5) H. VI. 134.
(6) 拙論「フッサール『イデーンⅡ』における世界と態度」、『哲学・思想論叢』（筑波大学哲学・思想学会）第八号、一九九〇年を参照
(7) H. VI. 138.
(8) H. VI. 138f.
(9) H. VI. 141.
(10) H. VI. 145.
(11) H. VI. 145. H. VI. 176.
(12) H. VI. 145.
(13) H. VI. 147.
(14) H. VI. 148.
(15) H. VI. 149.

(16) H. VI. 151.
(17) H. VI. 150.
(18) Vgl. H. VI. 176.
(19) H. VI. 155.
(20) H. VI. 162.
(21) H. IV. 280. また拙稿「フッサールにおける人格の問題――自然と精神の間で――」、『哲学・思想論集』（筑波大学哲学・思想学系）第二四号、一九九九年を参照
(22) Claesges, U., Zweideutigkeiten in Husserls Lebenswelt-Begriff, in: Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung, Phänomenologica Bd. 49, Nijhoff, 1972.（黄田青一・長坂淳一訳「フッサール〈生活世界〉概念に含まれる二義性」、『現象学の根本問題』、東洋書房、一九七八年）
(23) Claesges, U., a.a.O. S. 93.
(24) Claesges, U., a.a.O. S. 93.
(25) Claesges, U., a.a.O. S. 92.
(26) Claesges, U., a.a.O. S. 91. Anm. 19.
(27) H. VI. 138.
(28) H. VI. 141.
(29) H. VI. 141. Anm. 1.
(30) Claesges, U., a.a.O. S. 91.
(31) Aguirre, A., Die phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik, Enträge der Forschung Bd. 175, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982, S. 122.
(32) H. VI. 142.
(33) H. VI. 142.
(34) H. VI. 142.
(35) H. VI. 143.
(36) Waldenfels, B., Die Abgündigkeit des Sinnes, Kritik an Husserls Idee der Grundlegung, in: Ströker, E. (hrsg.), Lebenswelt und Wissenschaft in der Philosophie Edumund Husserls, Klostermann, 1979, S. 125.
(37) Aguirre, A., a.a.O. S. 122.
(38) Claesges, U., a.a.O. S. 94.
(39) Claesges, U., a.a.O. S. 96.
(40) Claesges, U., a.a.O. S. 97.

(41) Claesges, U., a.a.O. S. 96.
(42) Claesges, U., a.a.O. S. 97.
(43) Claesges, U., a.a.O. S. 95.
(44) Claesges, U., a.a.O. S. 97.
(45) H. VI. 176.
(46) H. VI. 176.
(47) Landgrebe, L., Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins, in: Phänomenologie und Marxismus II, hrsg. v. B. Waldenfels, Frankfurt a.M., 1977, S. 35.
(48) H. VI. 148.
(49) Aguirre, A., a.a.O. S. 126.
(50) 地平や生活世界等々の現象学の概念は、自然的概念であると共に超越論的概念である。しかしそれらの概念の両性性格は、自然的態度と超越論的態度との態度に基づいており、けっしてクレスゲスのいうような最初から二義性を保持している混合概念というわけではない。Vgl. Aguirre, A., a.a.O. S. 133.
(51) 実際のところフッサールは、「生活世界の存在論」という学に向かう態度については、詳細な検討をしていない。なるほどその学は自然的態度のもとでなされるが、全く日常的な生活の中での態度ではなく、その生活世界の類型性を探る以上、なんらかの主題化を必要とするが、その点が不明確なままに終っている。『イデーンⅡ』の領域存在論とこの生活世界の存在論との関わりに関して述べるなら、そのためもあって、なるほどどちらも自然的態度の類型性を述べている点では共通しているが、生活世界の存在論が全ての学の地盤を課題とすると述べている以上、直ちに完全に合致するものとはいえないのである。
(52) H. VI. 150.

Lebenswelt und ihre Thematisierung

—— Übergang zur transzendentalen Einstellung von der natürlichen Einstellung ——

Kobun SUZUKI

In der folgenden Überlegen zeigen wir, daß die Theorie der Lebenswelt bei Husserl mannigfache Bedeutungen in der natürlichen Einstellung und in der transzendentalen Einstellung beinhaltet, und daß die Lebenswelt Thema der Wissenschaft in beiden Einstellungen werden kann.

Husserl entwickelt die Ansätze zur seiner Theorie der Lebenswelt im Rahmen seiner Abhandlung über „Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie".

Wir wollen zunächst die Zweideutigkeit des Lebenswelt-Begriffs weiter explizieren. Es läßt sich dann eine Art Stufung von einem natürlich-ontischen zu einem transzendentalen Lebensweltbegriff feststellen.

Husserl selbst streift die Möglichkkeit einer Ontologie als einer Wissenschaft der Lebenswelt. Er sagt uns aber wenig über diese Ontologie. Er will nur die Möglichkeit einer natürlichen Ontologie andeuten. Diese Ontologie ist ein Stein des Anstoßes der phänomenologischen Forschung.

Wir wollen uns mit der Frage dieser Ontologie beschäftigen. Diese Überlegungen lösen das Problem eines möglichen Zwittercharakters der Lebenswelt. Die Bedingungen des Problems liegen in der Art, wie Lebenswelt in beiden Einstellungen thematisiert wird.

Unser Versuch einer Beantwortung der Frage nach Sinn und Recht des Anspruches, den Husserl an eine Theorie der Lebenswelt stellt, wird bei der Diskussion von Husserls Spätphilosopie von Nutzen sein.